昭和37年 5月28日 第3種郵便物認可　昭和42年1月1日印刷　1月5日発行　第7巻 第1号　毎月1回　5日発行

花影

1

1967

花影発行所

第3種郵便物認可
1月1日印刷　1月5日発行　第7巻 第1号　毎月1回　5日発行

あけまして おめでとうございます

本年も格別のご愛顧お引立の程お願い申し上げます

SEIBU西武
東京都豊島区南池袋1－28－1
電話 東京(981)0111 大代表

頌春

昭和四十二年元旦

花影

飛鳥冬……前川佐美雄（3）
巴……保田與重郎（4）
夏の旅……田中克己（6）
犬と猫の対比（上）……秦一郎（24）
同人作品……（8）
宮崎智恵　大伴道子　苑翠子　柳瀬丈子
中川三津子　有川満智子　宮師双美子　山本百合花
中市弘　尾崎文英　横山憲一郎　南谷恵
永野忠司　守口忠夫　木村一　辻林美代子
渡辺久子　鎌田紗紀子　早川静子　水野あづさ
秋葉ふじ　植田道子　稲葉こう　小林てつ
塩井ひさ　横尾雅世　阿部陽子　豊田智恵子
秋山末夫
会員作品……（26）
田島陸子　宮本菊　川村玲子　村瀬つね子
柴田嘉寿江　神野美江　高橋小登美　平畠芳技
室岡まさ　服部はつ　相木はる子　岡上信子
茨木はな　水村かね子　吉川信子　花村ゆき
吉田とよ　斉藤松子　田中静江　井上イツ
田中とみ江　杉建貞子　畠山英子　片岡すゑ
大関きぬ　中島市三郎　鈴木絢子　泉鏡子
千葉佳代子　早川美智子　清水和子　久野たか子
小川まさ子　原田弘子
花影作品評……中市弘（31）
苑翠子（32）
編集後記……宮崎智恵（33）
表紙　勝本富士雄　カット　勝本富士雄・大伴道子

飛鳥冬

前川佐美雄

われひそと飛鳥に来り竹さむくそよぐ古寺の塀に添ひゆく

岡の上の枯れくさに居り飛鳥代のゆゑ分かぬ岩冬の日に輝る（酒船石）

あすか代の巨いなる岩は岡の上に冬を盲ひて臥す如くある（石舞台）

正月の二日の日ぐれ人ひそと家出でて四、五本大根引ける

われよりも逞しかりし飛鳥なる古ともどちは耳しひてゐぬ

巴

保田與重郎

木曽福島から車行二時間ほど、木曽宮越に徳音寺といふ寺がある。山中ながらなかなかの構へは、代々木曽氏が護ってきたからである。ここは木曽冠者旗上げの土地で、義仲公が此地へ移った時、域を築き、母の菩提のために一寺を建立し柏原寺といったが、義仲公粟津に討死の後、太夫坊覚明が、これを公の菩提寺とし、よって徳音寺と改めた。寺域清閑の地である。この寺に公と巴御前の墓がある。建立は近世になってからであらう。巴御前の戒名は、この碑に竜神院殿真巌玄珠大姉とあった。宝治三年九月十五日九十一歳と歿した年が彫ってあった。宝治三年はその六月建長と改元された。

巴御前について、この女は木曽川の竜神の生れかはりだといふ伝説が、ここにあった。その竜神の棲んだ場所を、巴ケ渕と今も云ひ伝へてゐる。竜神は海神だが、海神が山奥や、山上に祭られた。水の源を山と考へたのである。

巴御前は旧来の物語芸能では、しきりにあらはれた女性だった。祭礼の山鉾の類にその俤が描かれることも、九州の果から、陸奥のさきにまで及んでゐる。絶世の美女であり、勇気が足り、力武芸も秀れ、荒馬乗も抜群で、男子に勝ってゐた。色白う髪長く、容顔まことに美麗なりと、「平家物語」にかかれてゐる。この二つが日本の美人の資格とされた年代は、平安時代より、昭和初期までつづいた。

以前は男子でも、美しい若者が勇士英雄だった。日本武尊の古から、木村重成をへて、江戸の庶民も、美しい若様を最もつよい人とした。最強の英雄は、丈夫も女子も、その容貌美しい女に似てゐた。それが代々の日本人の思想だった。

巴は美しく、つよく、勇気があって、その上にいさぎよい心根の女性だった。勇気があるから、美しく、又いさぎよく才長じてゐた。智恵が智恵として現はれるには、勇気がなくてはかなはないのである。

巴が木曽殿の最後の合戦に従つた時は、つひに七騎となるまて戦つた。さらに五騎となつても討たれなかつた。戦ひといへば必ず一方の大将に向けられたほどの一人当千の兵（ツハモノ）なりと「平家物語」はしるしてゐる。義仲公はこの戦で最後の決心をしてゐた、巴にも、「義仲が最後の軍に、女を具したりなど言はれんこと口惜し」と云つておりさせようとした。

巴は、「あっぱれよからう敵の出で来よかし、木曽殿に最後の軍して見せ奉らん」この時武蔵国の住人、御田（オンダ）八郎師重三十騎計りで出づ、巴その中へわつて入り、忽ち八郎とむんづと組んで引落し、わが乗つたる馬の鞍の前輪に押しつけ、少しも働かさず、頸ねぢ切つて捨てた。その後物具脱ぎ棄て、東国の方へ落行きける、と「平家物語」では終つてゐる。後の物語で巴の後日譚がいろいろつくられてゐるのは、同情からである。この最後の合戦に、まづ立向ふのが関東一とうたはれた美男子の勇者で、これが忽ちに打たれた。そこで畠山重忠が出てくる、重忠は巴の鎧の袖をとらへた時、巴は馬に一鞭して、東の方へ立去る、鎧袖のみ重忠の手に残つた。この話は「平家物語」の時はまだ出来てゐない。義仲公討死ののち、年をへて、一人の尼僧がその場所へきて、庵を結んで公の墓前を供養した。何人かと問ふと、われは名も無き一女性といふのみだつたが、まぎれもない巴御前の後身だつた。これが現地の土民の伝系で、義仲寺の根源巴寺の縁起にて又無名庵の由来といふ。芭蕉翁が無名庵をしたつて、ここにしばらく滞留したのは、翁が義仲公の人がら気象を愛し、又巴御前の俤を憬れたからであらう。義仲公討死の時巴御前は二十あまりの若い女房だつたから、七十年尼となつて菩提供養につとめたのは一日一日とすぎた日々としてみると、自然のことのやうだが、この自然はなかなかあり得ない。一日一日も、七十年とつもつた、その尼生活を考へると、気も遠くなる思ひがする。

日本人は巴御前がこんなまことある女性だと知つてゐたので、彼女を称へる物語芸能を数多くつくり、その墓と称へるものが私のきいただけでも各地に数ケ所ある。又子孫と信じてゐる家も残り、時々にこの木曽の墓所にも参拝するといふ。

彼女が初めて木曽公を知つたころ、荒馬に一鞭して、木曽川を一飛に、木曽殿の館へゆく。その時巴の乗馬のひづめの跡を残した岩が、徳音寺の境内にある。近世まで近くの長者の所有だつたといふ来歴をのべてゐた。

岩にひづめの跡が残つたといふのは、虚実皮膜の間の真実である。かういふ証拠をつくつた土民の物語のこころには、絶対の真実がある。一念岩もつらぬくといふ教へより、かなしく美しく、まことである。むかしの人の恋心に、一つのものの安心である。

巴御前が、代々の日本人の理想像だつたことは、文学史と芸能史が、歴史の証を残してゐる。今の義仲寺の所有でなく町内の所有とされてゐる。民間の信仰も絶えず厚かつた

夏の旅

田中克己

大伴さんが「冬の旅」、「秋の旅」とよい御本を二冊お出しになつた。それにつられてわたしも旅のことを一筆する。これが正月号にのる由なので、いへば去年の夏わたしたち夫婦は八月三日から六日間、台湾旅行をした。わたしは台湾は三度めなので、はじめてのカカア殿とはちよつと気持も違ふつもりだつたが、手続などで相当にくたびれて、いやになつたあと、羽田からたつた三時間で着いたのにはおどろいた。雲の上を飛んで、見えたのは霧島山と琉球だけだつたが、台北の飛行場について、午後三時のむし暑い最中を荷物を運んで検査をすまし、出ると待ち人がゐて、その中の三人は東京でいつも会つてゐる同学の士だから驚きもしなかつたが、台湾の友だちが楊さん、頼さんと旅行社の李さんと三人ゐて、六日間ずつとお世話になりつぱなしが、ここから始まつたわけである。

楊さんは昭和十七年、シンガポールからの帰りに寄つた時、わたしの演説をきいてくれ、お宅へ呼んでいただいたきりなので、二十四年目である。白髪でわたしの方はわからなかつたが、向ふはわたしを「すぐわかつた」さうである。文化学院を出て詩を作る人だつたのが、いまは大学教授である。しかしわたしと話してゐる中に、詩人らしくなつてしまはれたので、わたしも久しぶりに詩人の顔をして話した。頼さんも大学教授であるが、詩は作らず、史学者なので、わたしはお土産に本や論文をおわたしした。

李さんとは初対面であつたが、お宅へゆくと子供さんにピアノをひかし、讃美歌を歌はせられた。頼さんも御夫婦ともにクリスチャンで、奥さんは青山学院の卒業生、家内とは前からの知合のやうになつた。楊夫人もクリスチャン、わたしは「クリスマス・カードはあなただけには差し上げない」といつて、楊さんに悲しい顔をさし、この暮にその通りした。どうか楊先生がわたしと同じく聖書の雅歌や詩篇を愛誦されるやうになればと思ふ。

も一つこの旅でうれしかつたのは、台北からバスで三十分の「山のかた」といま呼ばれるもとの高砂族の教会へ礼拝にいつたことである。内地の教会とちがつてはゐたが、主に祈る気持は同じだつたらう。聖書の「マタイ福音書」の一節を長老がよんだあと、わたしは説教を求められてまごつきながら、「主のみいくさ」としてはあなたがたの方が強いといふことを述べ、天国で同じことばを話す日を主に祈つてこれを終へた。

この時の参会者はわたしのとつた写真が珍しくよくできてゐて、五十人を越えた人たちの顔がみなみわけられる。まんなかに立つてゐる家内とほとんど人種的差別がつかないが、ちよつとだけ顔の輪郭がはつきりしてゐるやうに思ふ。わたしはこのとき三年もちつづけた聖書を、日本語のよめる中老の婦人に贈つたので、いまもその部落にあると思ふ。

主をたたふるわれのことばはどもれどもをさな子のごとひたになりしよ

水きよくすずしき村を天国に近しとおもひ今も忘れず

その前日、朝からは李さんのハイヤーで台北州の北の海岸を一覧さしていただいた。基隆は知つてゐたが、その先の野柳岬といふ景色のよいところの、海の水の美しさはまた格別だつた。カラー・フイルムを売りに来たおばさんがゐて、「この先で日本の船が沈められました」といつて指さしてくれたので、フイルムを高い値で買つてしまつたが、おかげで近所がよくとれた。淡水のゴルフリンクで昼食をごちそうになつてゐると、カカア殿「ここに住めるなら一年位ゐたつてかまはないわ」といひ出したので、これはいけないと思つた。そのうへ台北市内の古本屋で買ひ集めた本が山ほどになつて、飛行機の積荷制限を越えるのではないかと心配し、六日目に「帰らう」といひ、タイ航空の便があつたので、帰つて来たのが、今となつては残念である。悪銭はカカア殿のおかげで使はず、日本についてから大枚のドルを日本円にかへてもらふ始末で、残念といふもおろかである。

ホンコン行やハワイ行がはやつてゐるさうだが、台湾の方が近いうへ、日本語も通じて便利である。夏には暑いだらうと心配する方もあらうが、ホテルはみな冷房だし、タクシーか三輪車に乗るのだから（道がわからない間は）、暑さの心配はない。冬に避寒になぞ行くバカはない。わたしは実は前述したシンガポール帰りが十二月のことだつたので、台湾が寒くていやな感じだし、おまけに風邪をひいてしまつた。日本からゆけば、比較的には暖かいだらうが、帰国と同時に風邪をひくおそれがある。風邪なんかといふ方があるかもしれないが、わたしなど「老齢で、風邪から肺炎になつて」といらぬ心配をするので、夏のご旅行をおすすめする。これも老年の一徴候で、若い人たちにきらはれるのも当然だなと思ふ。

とこ夏の島べをゆきて汝を恋ふとうたひしことはゆめのごとしも

かくばかりながく生きんと若き日は思はざりしよ恥かきすてて

ひとりゆくみちとおもひしわがうしろささやきたまふ声のきこゆる

さてわたしの生涯はどうやら冬の季節に入つた。はじめての台湾旅行はわたしが大学生だつた昭和八年で、時期はやはり八月だつたが、生涯では春だつたわけである。その時の一首を録して思ひ出とする。

相思樹

みんなみの島べさすらふわがうへをきみも忘れず思へとの木ぞ

歌人たちに歌ばかり見せてごめんなさい。

（四十一年十二月二十四日）

◇編集後記

あけましておめでとうございます。

元日から放射能の雨が降りましたから、さぞかし大地は固まったことでありましょう。

「花影」第七巻第一号、おくれましたが、ごらんのような玉稿をいただくことができました。「花影」は年頭に美事な旗をかかげたようなものです。

大いに晴れがましく、胸をふくらませ頭をあげて出発です。ことしも、つまづいたりころんだりはすることでしょうが、泥んこになっても前を向いて、仲よく手をつないでいきたいと思います。

十二月十八日の年末歌会は、忘年会も兼ねて赤坂プリンスホテルで行なわれました。歌会に田中克己先生、忘年会に勝本富士雄先生を迎え、三十三名出席。歌会の詠草の質は残念ながら、あまりよいものとはいえませんでしたが、忘年会の方は、渡辺久子さんの発案で「二十才のときのおはなし」を全員が披露し、なごやかに楽しい集いで、ことに二十才のときのおはなしは、聞きながしてしまっては惜しいくらいの傑作ぞろいでした。

例年のように一年間の全詠者、出詠歌百首以上の人の名をあげて拍手をいたしました。

昭和四十一年度の皆勤者は

大伴、横山、朝倉、中市、宮師、中川、深山、植田、塩井、服部、永野、南谷、渡辺、横尾、新田、田中とみ江、室岡、守口、宮崎

同、出詠百首以上

大伴198、中川151、守口147、水野134、尾崎124、宮師、横尾117、中市105、宮崎102、南谷100

これらは前半を宿谷ゆかりさん後半を中川三津子さんが調べてくださいました。忘年会のことは、中市、苑、宮師、中川さんたちにお骨折りいただきました。

昨年はふうとう書き、名簿作成など、中川さんにやって頂き大いに助りました。ことしもどなたか代っ、てよろしくお願いします。

（宮崎智恵）

「花影」規約抄

一、「花影」はどなたでも入れます。入会金不用です。

一、歌会は毎月第三日曜日午後一時―四時
　会場は赤坂プリンスホテル

一、会員は誌代三カ月分以上を納めて下さい

一、同人は一カ月三百円、別に維持同人制をもうけ、五百円以上をふたんして頂きます。

一、入会の手続、会費の納入、通信、送稿などは発行所あてにして下さい。

一、詠草は、かならず「花影」規定の用紙を使用のこと。（百枚綴百円）

一、添削希望の方は二百円封入の上詠草十首まで左記選者あて直送して下さい。
　宮崎智恵　武蔵野市西久保三ノ五ノ一三
　大伴道子　港区南麻布五ノ二ノ五　堤方

花影　1月号 第7巻 第1号

昭和42年1月1日 印刷
昭和42年1月5日 発行

編集兼発行人　宮崎智恵
印刷所（有）白馬印刷所
豊島区池袋2―931
発行所武蔵野市西久保3-5-13
宮崎智恵方　花影発行所
頒価　150円　〒6円